

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

50

車から降りて20メートルほどの道のりを歩く間、優子は必死で涙をぬぐうと、息を整えて家に入る準備を整えた。

和樹が車の中からこちらを二生懸命に見ている視線を強く感じたが、今、和樹の方を振り返ってしまうと、もう二度と家には帰りたくなくなってしまいうような気がして、唇をきつく結ぶと、早足で家に入った。

こんなに大好きな我が家、大好きな家族なのに、なぜこんなに切ない思いがするんだろう？和樹はもう妻と子供がいる自分の家に帰ったのだろうか？

どうやら娘たちは夫と一緒に風呂に入っているらしい。浴室の方から賑やかな声が聞こえてくる。

浴室のドアを細く開けて、「ただいま」と声をかけると、「あ！ママだ！おかえりー!!」と娘たちの元気な声が聞こえる。

「ママも一緒にお風呂に入ろうよ！」

「うん、ありがとう。ママはあとから入ろうかな。みんな湯冷めしないようにゆっくり温まってね。」

そう言うと、優子は寝室へ戻り、

ベッドの上に倒れ込んだ。

携帯を開くと、和樹からのメールの着信があった。

「優子、帰った？大丈夫？僕も帰ったよ」

慌てて返事を打った。

「うん、ありがとう、帰ったよ。でも、和樹さんがいなくてさみしい。」

「僕もだよ。家に帰っても、優子のことばかりが心に浮かんできて、」ああ、どうして、ここに優子がいなんだ？」ってとても寂しいよ。」

この文章を読むと、優子は胸が締め付けられるようにさらに切なくなつて、携帯を片手に枕につつぷして、泣きじゃくった。

(続く)